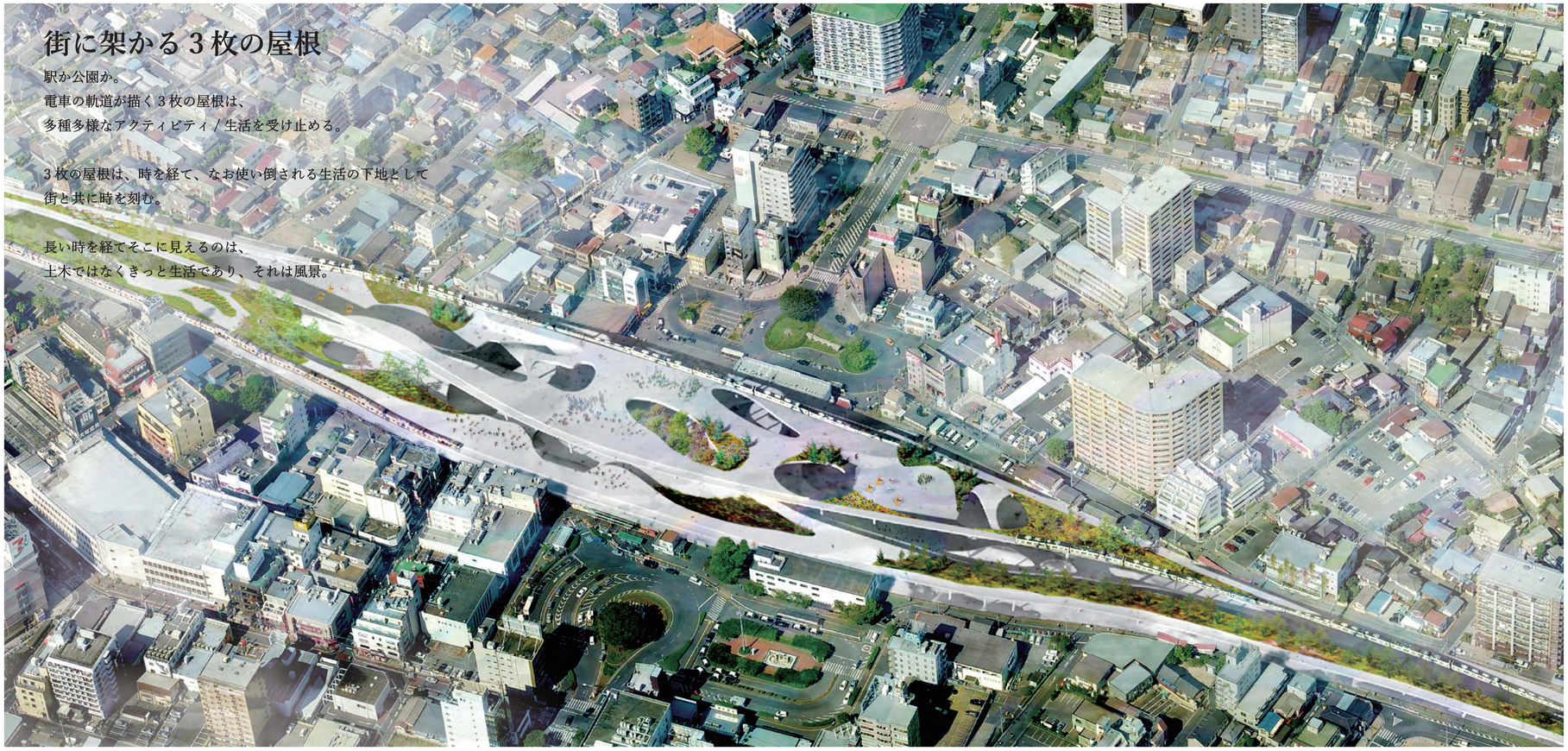
街に架かる３枚の屋根

駅か公園か。
電車の軌道が描く３枚の屋根は、
多種多様なアクティビティ／生活を受け止める。

３枚の屋根は、時を経て、なお使い倒される生活の下地として
街と共に時を刻む。

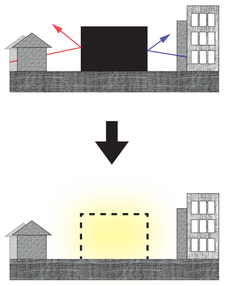
長い時を経てそこに見えるのは、
土木ではなくきっと生活であり、それは風景。



西口外観／今まで見えることのなかった逆口の様子が、街に架かる３枚の屋根から垣間見える。

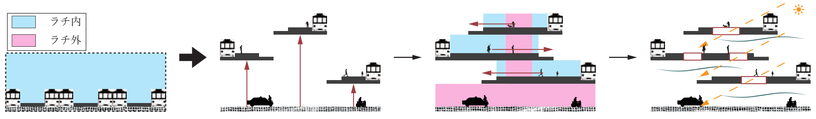
1階高架下／視覚的連続性に加え、アクティビティが街を１つにする。春日部名物の藤棚、随所に配置された植栽が人の居場所となり、無機質な高架下を彩る。

1. 春日部駅 橋上化計画 2020



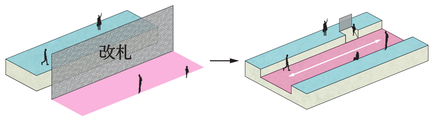
敷地は埼玉県春日部市、2020 年に予定されている駅の橋上化を対象として扱う。現在地上を走る鉄道は、東西の交流を完全に断絶しており、かろうじてそれらを繋ぎ止めるのは、県１番の開かずの踏切と、湿っぽい地下道、歩行者には不便な陸橋の３つのみである。
街の玄関口であり、生活の結節点としても機能する駅の在り方を、開かれた公園とのコンプレックスという新たなビルディングタイプで提案する。

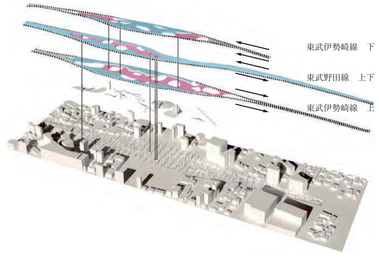
2. ブラックボックスとしての駅舎の解体 / 公園化



現在のブラックボックス化した駅舎　各プラットフォームを異なる高さに設置　スラブ拡張による、同一平面上のラチ内外共存　ヴォイドの操作による一体空間の拡張

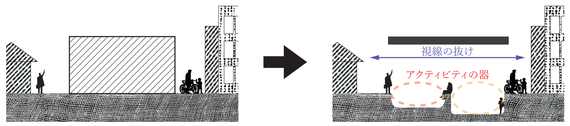
橋上化する際、各プラットフォームを異なるレベルに配置し、幅員を拡張する事で、最上階まで誰もが回遊することができるようになる。地方都市に貴重な駅での賑わいが街にもあふれだし、様々なアクティビティが交錯するようになる。



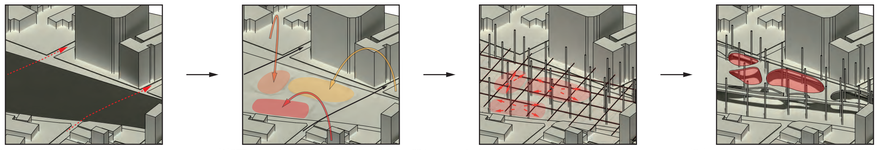


動線を制御しながらもラチ内外を一体空間として存在できるよう、壁によるゾーニングではなく、レベル差を用いて行った。高さ 1500mm のレベル差は、従来の駅舎では難しかった、改札口を超えた交流を様々な角度で可能にする。また、各スラブはそれぞれ別路線の車両が発着するように計画しているため、乗り換えもスムーズに行うことが可能となっている。

3. 街をアクティビティで繋ぐ高架下



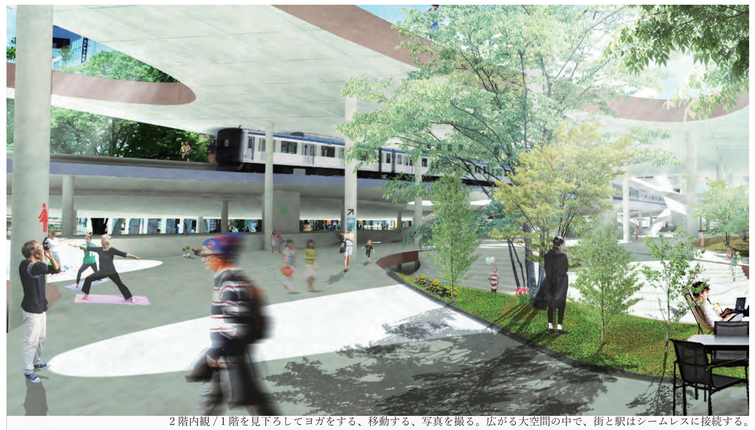
地方都市中心部という場所性を考えた集客の在り方を考える。
長期的視点から、単なるコンテンツの挿入ではなく、人のアクティビティそのものによって魅力が生み出されていくことを考える。
高架下のゾーニングを周囲のコンテクストからランドスケープとして計画する。
都市の余白空間となる高架下は、時には街の賑わいを受け止める器として、時には賑わいを発信する街のツボとして、街と共に育っていく。



駅を跨ぐ道と道を結ぶ。　高架下に生まれる区画に、「アクティビティの器」を配置していく。　フラットスラブ工法、柱はϕ=1000mm。1200mm 角に１つの柱を、「器」を避けつつ線路下には必ず配置されるように計画する。　規定の柱スパンを超える部分をヴォイドとし、躯体軽量化を図る。結果として「器」上部にヴォイドが重なり、アクティビティが拡散される。

街のコンテクストから形成された高架下空間のランドスケープ。長いときを刻むに連れ、多様なアクティビティの下地、新たな文化を生み出す場として、いつしか欠かすことのできない街の風景へと姿を変える。

4. 折り重なる３枚の屋根が創り出す環境



２階内観／１階を見下ろしてヨガをする、移動する、写真を撮る。広がる大空間の中で、街と駅はシームレスに接続する。

模型写真 内観／電車がつくる風が樹木を揺らし、ヴォイドの重なりが光や雨を内部に引き込む。心地よい環境的ムラは、市民に多くの居場所を創出する。